創造的な学習空間の創出に関する調査研究　報告書概要

目的　**「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善及び「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に向けて、学校施設も柔軟で創造的な学習空間を実現する必要があるため、その空間づくりにおけるポイントや具体的な計画モデルを提案し、各教育委員会等が学習空間づくりを行う際の参考にしてもらうことを目的とする。**

質問紙調査

（20校の公立学校を対象）

・学校施設に関する基礎情報
・学習形態と学習空間の現状と課題について

現地調査

（８校の国公私立学校）

・先進的取組を行う学校の学習形態に応じた学習空間の現状と課題について

質問紙調査・現地調査の結果からみえたこと

○学習活動の特徴

・学習活動に応じて、集団の規模、教員の役割、空間の活用などが変化
・インプットだけでなくアウトプットすることに重きを置いた学習活動
・デジタルを有効に機能させた、ビジュアル的な学習活動
・学内のみでなく地域との交流・学びなど、時間と空間を超えた学習活動

○学習形態の頻繁で柔軟な変化

・「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」に向け、教師による一斉指導、グループ学習、個人で学ぶ学習が同時に行われるなど、頻繁かつ柔軟に学習形態が変化するとともに、それぞれの学習形態が相互に学びを補完し合う状況
・子供一人一人が自ら学びに向かう学習へと転換（子供中心で学習形態が形成）

学習形態・活動を支える上でみられた学習空間の課題

・学習空間の広さ
・教室周りスペースの連続性
・隣接する部屋等の配置計画
・学校用家具の活用・工夫

調査結果から得られた実態と各委員の論考を踏まえ

柔軟で創造的な学習空間づくりの具体的なポイントを各教室種別・目的に応じて整理し、提案（抜粋）

○多様な学習形態・活動の変化に柔軟に対応できる普通教室

・机寸法の拡大、自由な配置転換に対応できる教室スペースを確保する
・教室の寸法、面積を整備時に拡張する
・児童生徒用ロッカー、掃除用具入れ、配膳台等を教室の外に配置する
・壁面を確保し、教室の正面性をなくす

教室前に設けたロッカーコーナー
（川口市立高等学校附属中学校）

○多様な学習活動に対応する多目的スペース

・教室に連続して学習の場を生み出す
・視覚的連続性を持たせる
・場を生み出す学校用家具やインフィルを用意する
・壁面を確保する
・空間に可変性を持たせる
・Wi-Fi環境を整える

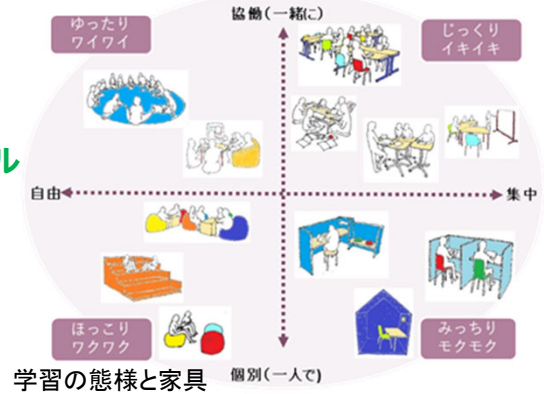
多目的スペースでの協働学習
（福井市至民中学校）

○ＧＩＧＡスクールを生かす教室・多目的スペースの環境

・個人机の机面を大きくする
・大型提示装置を用意する
・多目的スペースにも投映面を設ける

○学習空間を構成する家具・インフィル

・学習環境を構成する基本的な家具
（モノ・配置の重要性）
・学習環境を豊かにする家具
（家具選定の重要性）
・空間の骨格を変えるインフィル
（柔軟な空間の可変性への対応）



学習の態様と家具

※未来の学びを支える環境と校具Vol.3, AKS研究会より

新しい学習空間となり得る学校施設全体の構成の提案

➢ **学年コモンズによる学習空間モデル**
（大きな帰属集団による様々な場所を配置した学習空間ユニットを構成）
➢ **教科センター方式による学習空間モデル**（学びのための環境として特化）

これからの学びを実現するための空間を考えようとする場合の「６つ」のキーワード

①コモン/シェア（専有しない）②ダイバーシティ（多様性）③シームレス（連続性）④モードチェンジ（時間や場面による空間の変容）⑤リダンダンシー（冗長性）⑥ウェルビーイング（心地よさ、五感に優しい）

（別紙）

創造的な学習空間の創出に関する調査研究
報告書＜概要版＞

第１章　新しい時代の学びとこれからの学習空間の現状と課題

【背景】

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが求められている。

そのような中、学校施設において、「主体的・対話的で深い学び」の推進に当たり、ＩＣＴ活用等による学習の個別化の進展や協働学習などこれまでにない学習方法や学習形態の多様な展開を可能とする学習空間が必要であり、新しい時代の学びを実現する学習空間づくりは極めて重要である。

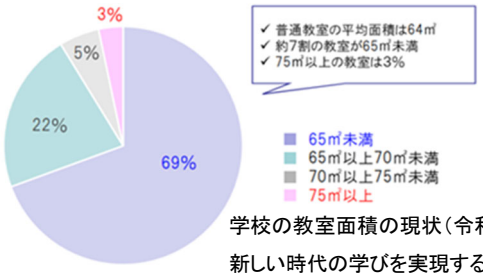
【これまでの学校施設、学習空間】

〇廊下に面して普通教室や特別教室を単純に配置した片廊下一文字型の画一的な学校施設

〇普通教室は、学級単位で黒板の方を向いた一斉授業を行う学習空間

〇公立小中学校の普通教室の平均面積は64 ㎡であり、69％の教室が65 ㎡未満

〇普通教室には児童生徒用ロッカー、掃除用具入れ等が置いてある（これらが一定の面積を占め、壁面の活用も損なうなど、学習活動の制約になっているという指摘がある）



学校の教室面積の現状（令和元年度）

新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について（最終報告）参考資料より（文部科学省資料）

第２章　新しい時代の学びとこれからの学習空間に関する調査

【質問紙調査】※調査期間令和３年 11 月４日から 12 月３日

〇調査対象

アクティブ・ラーニングに積極的に取り組み、ＩＣＴを活用した学習を進めるなど、様々な視点から全国の小学校、中学校、施設一体型小中学校（義務教育学校を含む）の20 校を抽出。

・「学校施設に関する基礎情報」は学校設置者（教育委員会等）を対象に回答を依頼。

・「学習形態と学習空間の現状と課題」は各学校の教員を対象に回答を依頼。

〇調査対象者数

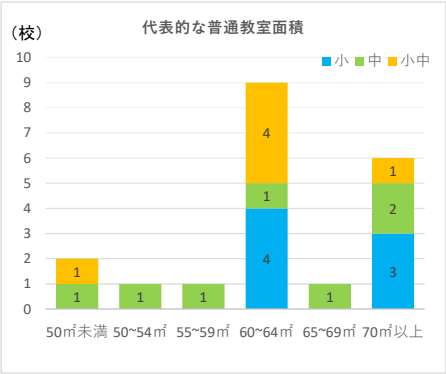
・学校設置者（教育委員会等）　18設置者

・小学校（小学校７校＋小中一体型６校）の教員39名

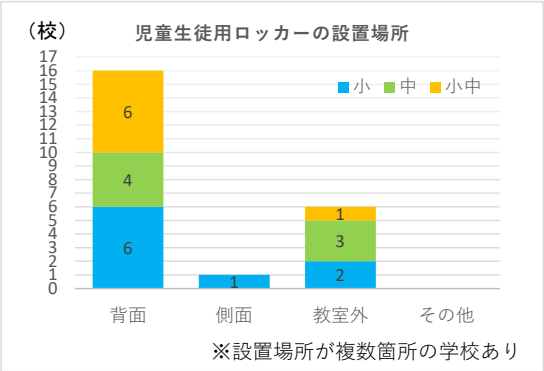
（低・中・高学年各１名：13校×３名）

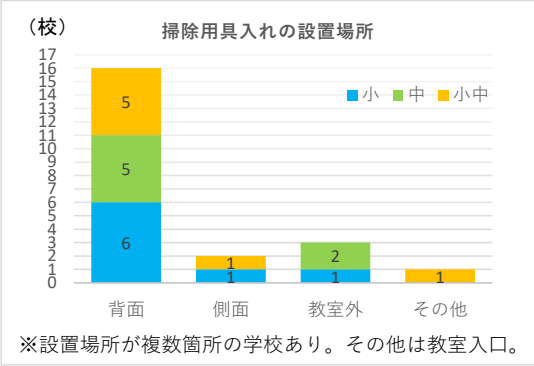
中学校（中学校７校＋小中一体型６校）の教員13名　計52名

○主な結果（結果の一部を掲載）※抽出調査のため、全国の一般的な傾向とは異なることに注意。

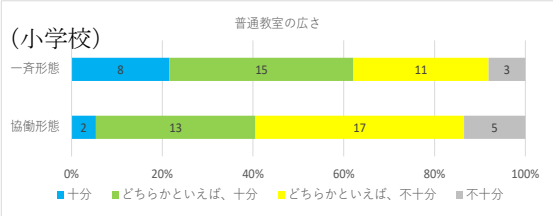


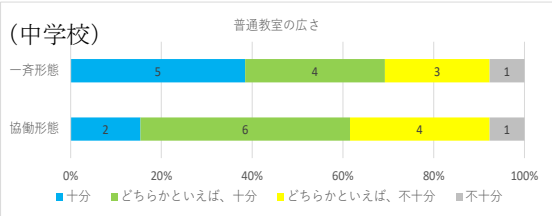
抽出した20校の調査においても、普通教室の面積は、60㎡以上65㎡未満が45％と最も多く、65㎡未満が65％となっている。



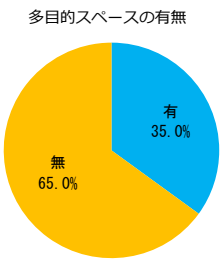


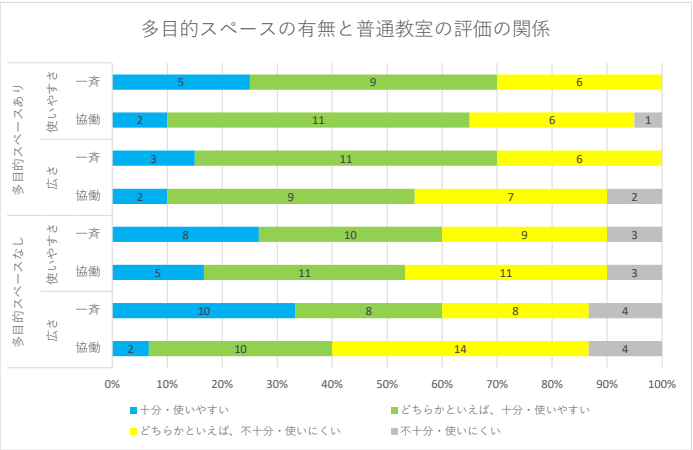
普通教室の面積が65㎡未満の学校が多い中、児童生徒用ロッカーや掃除用具入れなどは80％が普通教室内背面に配置されている。





児童生徒が一方向を向いた一斉に授業（一斉形態）を受ける場合、不十分（どちらかといえば、不十分を含む）と評価している割合が小学校で約40％、中学校で約30％。グループ学習等の多様な学習活動（協働形態）を行う場合は更に不十分の割合が増加。





20校のうち、多目的スペースを持つ学校が７校（35％）、持たない学校が13校（65％）。

多目的スペースを持つ学校の方が持たない学校に比べ、普通教室の広さが十分、普通教室が使いやすいと高く評価している傾向が見られる。

【現地調査】※令和３年 11 月～12 月に実施

〇調査対象

アクティブ・ラーニングに積極的に取り組み、ＩＣＴを活用した学習が行われている学校として、国公私立の小学校、中学校、義務教育学校等を含む次の８校（事例掲載順）

【国立（義務教育学校）】福井大学附属義務教育学校

【公立（中学校（教科教室型））】福井市至民中学校

【公立（中学校（教科教室型）】福井市安居中学校

【公立（中学校）】春日井市立高森台中学校

【公立（小学校）】春日井市立藤山台小学校

【私立（幼稚園、義務教育学校）】学校法人軽井沢風越学園

【公立（中高一貫高）】福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

【公立（高等学校附属中学校）】川口市立高等学校附属中学校

〇現地調査から見えてきた状況（総括）

１ 学びの変化

学習する子供の視点、とりわけ、子供の能動性を意識したアクティブ・ラーニングの視点からの学びを実現することが期待されている。「主体的・対話的で深い学び」や、一人一人の子供に対応するアダプティブ・ラーニングの視点からの「個別最適な学びと協働的な学び」に通じる学びが各学校で意識されてきており、学習活動や学習形態において、以下のような特徴を捉えることができた。

（１）学習活動の特徴

・ 黒板に正対し教員が一斉に指導する学習活動、学級全体での教員がファシリテートする子供たち相互の意見交流、小集団による意見交換、情報端末を活用して一人一人が個別に行う学習活動などに応じて、集団の規模、教員の役割、空間の活用などが変化し、多様な学習活動が行われていた。

・ 黒板やモニター、スクリーンを見るなどして、知識を習得する学習活動、一人一人が情報端末や図書資料、文献などを使って知識を収集したりする学習活動、他者との意見交流や相互に意見交換する学習活動、自らの考えを発表したり表現したりする学習活動、考えをまとめたり整理したりする学習活動が行われ、インプットだけでなくアウトプットすることに重きを置いた学習活動が行われていた。

・ 紙や鉛筆、黒板を使った学習活動だけではなく、情報端末や電子黒板、プロジェクターとスクリーンなどの大型提示装置を使った学習活動が行われている。動画や静止画の利活用、学習状況の可視化や共有化などデジタルを有効に機能させた、しかもビジュアル的な学習活動が行われていた。

・ 学級内の子供同士だけではなく、地域の人との交流、学校外の教育施設での学び、地域や家庭での学びなど、時間と空間を超えた学習活動が行われていた。

（２）学習形態の変化

・ 学級集団全体に対する一斉学習、目的や習熟に応じた様々なグループ学習、一人一人

が個別に行う個人学習などが一つの授業の中で同時に行われるなど、頻繁にフレキシブルに変わる状況が見られた。

・ 互いに関わり合う協働的な学習と一人一人が個別に行う学習とが行われ、学習形態が相互に補完し合う状況が見られた。

・ 教員が中心となって知識を伝授する学習から、子供一人一人が自ら学びに向かう学習へと転換が図られ、学習形態が子供中心で形成される状況が見られた。

２．学習空間の課題

・ 多様な学習活動に対応するフレキシブルな空間や一人一人が情報端末を用いた学習及び電子黒板、プロジェクター等の機材を使ったデジタル化を活用した学習形態を進めていく上では学習空間の広さが不十分

・ 学級単位における教室内で行われる同期・集中の学びだけでなく、同じ学年の他の学級の児童生徒や保護者、地域社会の住民を含めた様々な組合せの非同期・分散の学びが行われ始めている状況が見られたため、学級で使用する普通教室、学年で使用するオープンスペースだけでなく、異学年の児童生徒、学校全体、さらには保護者、地域住民とともに使用できる多目的スペースの存在が重要

第３章　論考：これからの学習形態、これからの学習空間

各委員の専門的な知見をもとに以下のテーマについて論考を取りまとめ（掲載順）

○「令和の日本型学校教育」が目指す学びとこれからの学習形態
（國學院大學人間開発学部初等教育学科教授 田村 学）

○教育現場の立場から捉えたこれからの学習環境　（横浜市立鴨居中学校長 長島 和広）

○川口市立高等学校附属中学校における新しい学びの姿
（川口市立高等学校政策アドバイザー 藤井 春彦）

○ＧＩＧＡスクール構想によるこれからの学習活動　（東京学芸大学教育学部教授 高橋 純）

○ＩＣＴ活用によるこれからの学習形態と学習空間
（株式会社内田洋行教育総合研究所主任研究員 井上 信介）

○教科センター方式中学校の実例に基づく、これからの学習空間
（有限会社設計工房顕塾代表取締役 柳川 奈奈）

○創造的な学習空間－おおぐろの森小学校の設計を踏まえて－
（株式会社日本設計プロジェクト管理部フェロー 小泉 治）

○フィンランド、オランダ、スウェーデンの事例から見えてくる教室まわりの空間
（東京理科大学理工学部建築学科教授 垣野 義典）

○自ら学び共に学ぶ環境とデンマーク等のコモンコア（内部広場）を内包する学校建築
（神奈川大学建築学部建築学科准教授 立花 美緒）

○“コモンズ”による学習空間の再構築
（国立教育政策研究所客員研究員、株式会社教育環境研究所所長 長澤 悟）

第４章　新しい時代の学びと創造的な学習空間

質問紙調査、現地調査、各委員の論考をもとに教室種別、目的により空間づくりのポイントを整理（※各空間づくりのポイントをそれぞれ整理しているため、類似内容が重複して出てくる場合もある）

《普通教室関連》

■多様な学習形態・活動の変化に柔軟に対応できる普通教室

（空間づくりのポイント）※以下は報告書の内容を要約して掲載

①　<u>机寸法の拡大、自由な配置転換に対応できる教室スペースを確保する</u>

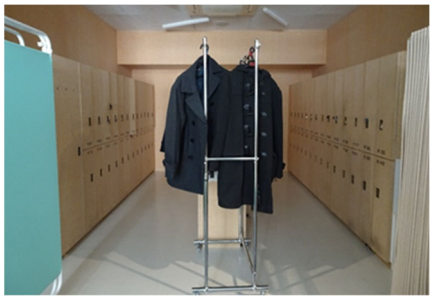
一斉学習、個別学習、協働学習などの学習形態に応じて、机を配置でき、また配置転換のしやすい普通教室の広さと形状を確保する。

②　<u>教室の寸法、面積を整備時に拡張する</u>

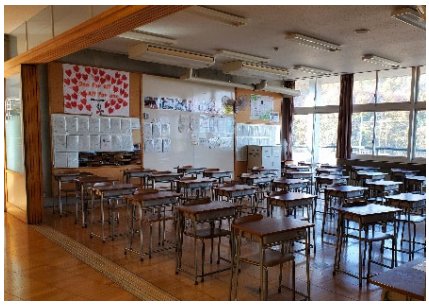
クラスルーム・普通教室あるいは教室まわりの面積として、一人当たり３㎡程度を目標とする。教室自体をその寸法とすることが難しい場合は、教室まわり空間として、２、３クラスでユニットを構成し、廊下や多目的スペースと合わせて一人当たり３～４㎡を確保する方法が考えられる。この場合、そのユニットを他学年等が通り抜けることのない動線計画が不可欠である。

③　<u>児童生徒用ロッカー、掃除用具入れ、配膳台等を教室の外に配置する</u>

限られた教室の面積を学習活動の場として最大限利用し、教室空間を学習の場として整え、また、壁面を学習に生かす等のために、鞄（かばん）棚や学習活動に直接関係ない収納家具を教室外に置くことが有効である。



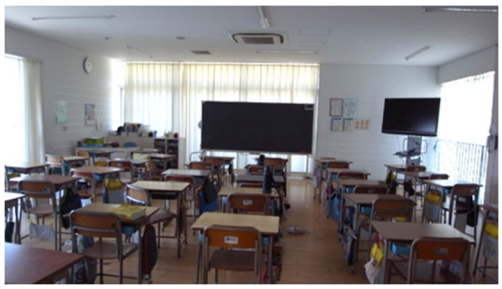
教室前に設けたロッカーコーナー
（川口市立高等学校附属中学校）



教室背面がホワイトボードで学習の場となる
（福井市至民中学校）

④　<u>壁面を確保し、教室の正面性をなくす</u>

従来の教室は、正面に黒板、背面に児童生徒用ロッカー、窓面からなる四角い、方向性の強い空間である。多様な協働学習の場として自由度を高めるためには、方向性のない教室とすることが有効と考えられる。様々な方向の壁を書く、映す、貼ることができるようにし、その前でグループ活動や発表等ができるようにする。



複数の開口面を確保し、4面に壁を用意した
教室配置例（立川市立第一小学校）

教室背面のロッカーをなくし、ホワイトボード
の壁面を利用した学習（福井市至民中学校）

普通教室に関連して、以下の空間づくりについても同様に整理（ポイントの項目のみ表記。詳細は報告書を参照）

■多様な学習活動に対応する多目的スペース
（空間づくりのポイント）
① 教室に連続して学習の場を生み出す
② 視覚的連続性を持たせる
③ 場を生み出す学校用家具やインフィルを用意する
④ 壁面を確保する
⑤ 空間に可変性を持たせる
⑥ Wi-Fi環境を整える

■自由度の高い教室ユニット・教室まわり空間
（空間づくりのポイント）
① 教室と多目的スペースでユニットを構成する
② 教室と廊下・多目的スペースを組み合わせ、自由度のある面積を確保する
③ ユニット内を通過する動線がない教室ユニット配置とする
④ 多様な場所、コーナー等を用意する
⑤ 壁面を確保する
⑥ 音環境に留意する

■ＧＩＧＡスクールを生かす教室・多目的スペースの環境
（空間づくりのポイント）
① 個人机の机面を大きくする
② 大型提示装置を用意する
③ 多目的スペースにも投映面を設ける

プロジェクターを組み合わせた黒板の例
（板橋区立赤塚第二中学校）
※AKS 研究会資料より

■学習空間を構成する家具・インフィル
（計画のポイント）
① 学習環境を構成する基本的な家具（モノ・配置の重要性）
② 学習環境を豊かにする家具（家具選定の重要性）
③ 空間の骨格を変えるインフィル（柔軟な空間の可変性への対応）

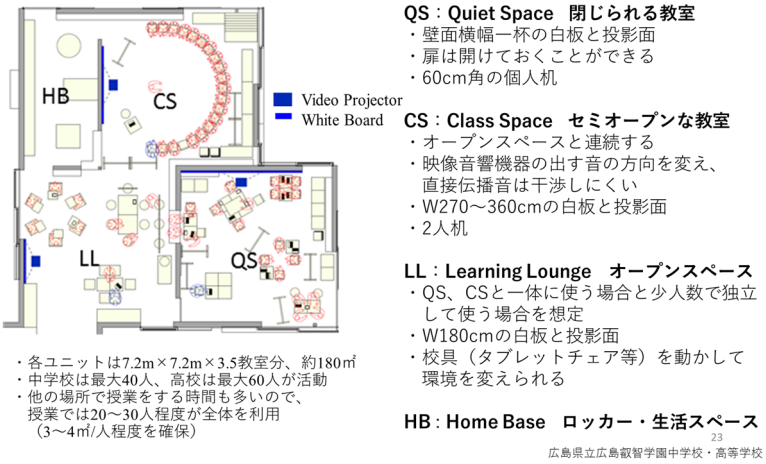
そのほか、特別教室、共通学習諸室に関しても整理している。

第５章　創造的な学習空間モデルの創出

現地調査、論考の事例を用いて、学校施設全体において創造的な学習空間を構成できる新しいモデルの提案を試みている。（報告書より主な部分を抜粋）

〇学年コモンズによる学習空間モデル

学習集団を２～４クラス（70人～120人程度の児童生徒に３～５人程度の教員）の帰属集団で構成する新しい学習形態の可能性が考えられる。大きな帰属集団による学習形態を実現する学習空間として、クラスサイズの教室や小教室、オープンスペース、オープンな教室や閉じられた部屋、作業コーナー、水場等の様々な場所のある学習空間ユニットを構成する。

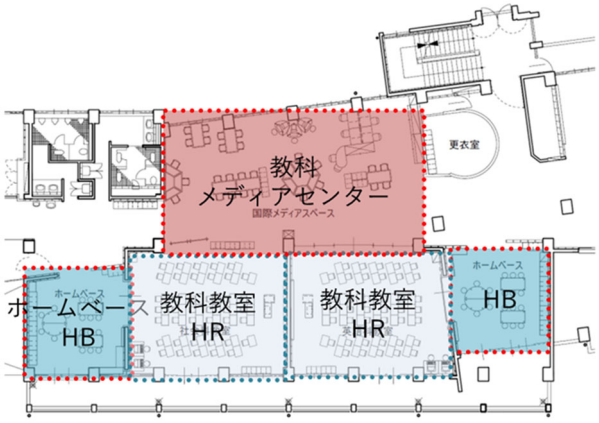


学年コモンズの構成例（広島県立叡智学園中学校・高等学校）

〇教科センター方式による学習空間モデル

教科担任制をとる中学校、また今後は小学校高学年においても、教科指導の充実、個別の学びや協働的な学びを自由に展開するためには教科教室型の運営方式が有効と考えられる。普通教室を教科教室としてまとまりをつくり、教科のメディアスペース、教科の教材室、クラスの生活拠点やロッカースペースとなるホームベース等を組み合わせて教科センターを構成する“教科センター方式”の検討が期待される。

教科教室は学びのための環境として特化することができ、無意識のうちに目に触れる様々な展示や掲示も含めてその教科を前面に出し、教科の魅力や雰囲気で生徒をもてなすこともでき、教科教育の充実を支える環境づくりができる。



教科センター方式のユニット（大洗町立南中学校）

○フィンランドモデル、オランダモデル、スウェーデンモデル、デンマークモデルの紹介

・　フィンランドの学校では、余裕のある面積のクラスルーム内に様々なコーナーを用意して、その中で多様な活動が同時に展開

・　オランダの学校では、クラスルームを確保した上で、別に性格の異なるコーナーを設け、多様な家具を用意して、そこを共用しながらクラスごとに多様な活動を展開

・　スウェーデンの学校では、クラススペースは確保しながら、共有の室やスペースを組み合わせてユニットを構成し、他クラスがいないときにはクラススペースも含めて余裕のあるスペースで場所を選びながら学習を展開

・　デンマークの学校では、全校の中心的な位置に広いスペース（コモンコア）を確保し、そこを共有することでクラスルームではできない活動を行い、また全校の交流・活動の場として展開

おわりに

これからの学校空間を考え、これからの学びを実現するための空間を考えようとする場合のキーワードをもって本報告書のまとめとしている。

①コモン/シェア（専有しない）

学年や複数クラス、あるいは教科等によるユニット（コモンズ）を構成し、クラスルームとなる教室も、学習場面では特定のクラス専用の場とせずにクラスや集団を超えて、活動の人数や活動の性状に応じてお互いが使えるようにする。

②ダイバーシティ（多様性）

コモンズを構成する各教室は、画一的な空間ではなく、教室ごとにクローズド、オープン、セミオープンな空間、色や雰囲気、机や椅子の種類、黒板・ホワイトボードの性状・形状・大きさ等に変化をつけ、学習の性格や狙いにあった場所を選んで使えるようにする。

③シームレス（連続性）

教室やコモンズ、特別教室同士、その他学校空間全体が自然につながり、お互いに見え合うように配置することにより、クラスを超えた集団による学習活動や教科横断的な学校や教科の枠活動の広がりを生む。

④モードチェンジ（時間や場面による空間の変容）

教室・特別教室、その他の空間は、時間割編成や運営上の工夫により、時間あるいは期間の中で使われ方や集団が変えられるよう、空間の可変性、家具やインフィル、ＩＣＴ環境を用意する。

⑤リダンダンシー（冗長性）

学習活動の発展、メディアやＩＣＴ技術の進歩、配線・配管の増設やシステムの変更等に対して柔軟に改変、拡張できる冗長性を持たせる。

⑥ウェルビーイング（心地よさ、五感に優しい）

変化のある空間、好きな場所が選べる、五感に優しい空間、家具、仕上げ等による心地よい空間が、自分が大事にされているという感情とともに、前向きな気持ちを生み出すようにする。